ひょうごの医療

シリーズ33　アレルギー⑤　食物アレルギー

経口免疫療法

原因物質を少量ずつ摂取
耐性つけ重篤症状回避

芦屋市に住む田中千穂ちゃん(4)＝仮名＝は1歳になる少し前、粉ミルクを飲んで頬や腕に赤い発疹が出た。母親の亜紀さん(35)＝仮名＝は、かわもり小児科（同市竹園町）に連れていき、血液検査を受けさせた。その結果、乳製品に強いアレルギー反応を示すことが判明。院長の河盛重造さん(58)の指導で、乳製品を少しずつ摂取して耐性をつける「経口免疫療法」を始めた。

■0・1ミリリットルから

2008年度の厚生労働省研究班報告によると、食物アレルギーの原因物質は鶏卵が最多で、乳製品、小麦が続いた＝グラフ参照。

「従来はアレルギーを起こす食品（アレルゲン）は極力口にしないのが治療の主流だったが、近年、誤って少量食べても重篤な状態に陥らないよう、少しずつ食べさせる治療法に変わりつつある」と河盛さん。「年齢が低いうちに始める方が結果が得られやすい」と指摘する。

「血液検査の結果だけを見て、アレルゲンとなる食物を不必要に除去しているケースも多い。まずはアレルギー科の専門医に相談を」と話す河盛重造医師＝芦屋市竹園町

千穂ちゃんは1歳10カ月から牛乳を含む食パンを少しずつ食べ始め、1カ月後に8枚切りで1枚の半分を食べられるようになった。

2歳半になった千穂ちゃんは、次に牛乳そのものを微量ずつ摂取する治療を開始。毎日0・1ミリリットルずつから始めた。飲む量を徐々に増やしたが、1カ月後、2ミリリットルになったところでじんましんの症状が現れた。そこでまた量を1ミリリットルに減らし、抗アレルギー薬を飲みながら続けた。

■急な腹痛

こうした一進一退を繰り返しながら4カ月がたった2012年9月、千穂ちゃんに異変が起きた。朝、牛乳4ミリリットルを飲んで保育所に向かう途中、急に腹痛を訴えたのだ。亜紀さんは救急車を呼んでもらい、河盛さんの医院に向かった。

千穂ちゃんは顔色が悪く、おう吐と下痢、目の周りの腫れも見られた。河盛さんは、短時間で全身に現れるアレルギー反応「アナフィラキシー症状」で、重症度を5段階のうち軽い方から2段階目と診断。ステロイド薬のシロップを飲ませ、落ち着くまで様子を見た。

「飲ませる量が規定より、ほんの少し多かったのかもしれない」と亜紀さん。河盛さんは「経口免疫療法で少し量が増えてきたころは、ちょっとした量の増加や、風邪気味などで体調が悪いとき、または食後、運動したときにもアナフィラキシー症状を起こすことがある」と話す。

こうした事態を想定するからこそ、河盛さんは朝、牛乳を飲ませることを勧めている。「もし容体が急変しても、朝なら病院や医院で対応できる」とし、体調が悪いときなどは保護者の判断で減量するよう指導している。

千穂ちゃんの場合、ショック症状を緩和させるアドレナリン自己注射薬「エピペン」を常備するまでの必要はないと判断し、旅行などで長期間外出する際は、ステロイドの粉薬を携帯するよう処方した。

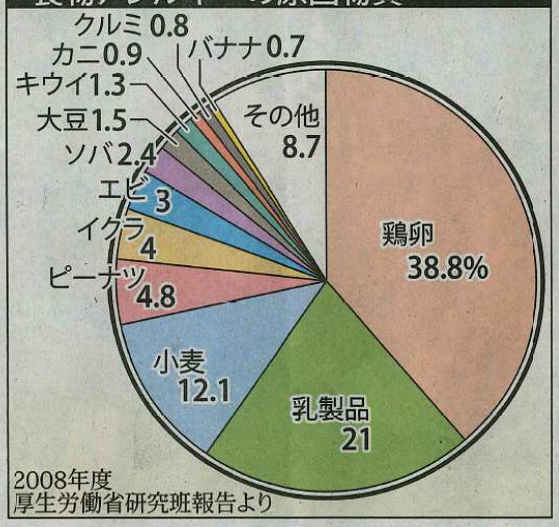
■就学までに

千穂ちゃんは、その後も飲む量を調節しながら治療を継続。13年8月には再び1回目と同様のアナフィラキシー症状を起こしたが、現在は1回に39・4ミリリットルが飲めるまでになった。牛乳は厳密に計量し、乳製品が含まれている菓子パンなどの加工食品は、亜紀さんが量を調節して食べさせている。

「20ミリリットルを超えて飲めるようになると安定してくる」と河盛さん。この治療では、最終的には卵1個、牛乳なら200ミリリットル、小麦製品はうどん1玉程度など、1回に標準的な1人前の量を食べられるようにすることを目標としている。

ただ、河盛さんは「千穂ちゃんの場合、まずは50ミリリットルくらい飲めるようになればいい」とし、治療方針について「小学校入学前に、乳製品を含む食品を誤って食べても重篤なアナフィラキシー症状を起こさないようにしたい」と説明する。

■食物アレルギーの原因物質



2008年度
厚生労働省研究班報告より

る季節。バリアー機能が
、アレルゲンを経皮感作
くなる」
レルギーの発症経路は複
と河盛院長。「食物アレ
の予防には、正しいスキ
も必要」とし、化粧品も
と同じ成分だから』『自
のものだから』と安心は
い」と話している。

しずく石鹸」の旧製品（国民
ンター提供）

ご意見、ご感想をお寄せください